



2025.03

芦屋市立美術博物館

美博 だより

小出檐重《仏蘭西人形》

1923年 油彩、カンヴァス
45.6×37.8cm

鮮やかな緑のドレスを身にまとった人形は、作者の小出檐重が、1921年からの約半年間のフランス遊学の土産として持ち帰ったものです。遊学を経て小出は、西洋の文化である油絵を日本人が描くためには西洋人の気質を体得することが必要と考え、帰国後の生活を洋風に一変させました。この人形も、ヨーロッパの雰囲気を出させてくれる大切なモチーフであったのでしょう。小出の多数の作品に登場するほか、彼が自宅で絵を指導していた松井正や山崎隆夫も、この人形を描いています。本作は、2023年度に当館へご寄贈いただいた作品です。



館蔵品紹介 …………… 1, 8

展覧会報告 …………… 2-4

学芸員コラム …………… 5-7

- コレクション特集
アプローチ！アーティストに学ぶ世界のみかた
具体美術協会／芦屋
- 創立100周年記念
信濃橋洋画研究所—大阪にひとつ美術の花が咲く—
- 今井祝雄—長い未来をひきつれて
- 芦屋の文化財再発見—最新のヨドコウ迎賓館温室跡発見まで—
- 第42回 芦屋市造形教育展
- とあるひのこと 平井真美子
- 歴史資料展示室 企画展示
令和5年度芦屋市内遺跡発掘調査速報展
芦屋と阪神・淡路大震災

- ピナコテカファッションショー／
具体美術協会と大阪万博
- 信濃橋洋画研究所 終焉のとき—戦時下の画家たち
- 新収蔵品と児玉多歌緒

コレクション特集

アプローチ！アーティストに学ぶ世界のみかた
具体美術協会／芦屋

2024/4/13(土) — 6/9(日)

本展は2つの特集を同時開催したコレクション展である。

世界にあふれる物事を、独自の視点でとらえ、作品を制作することで可視化し、私たち鑑賞者に豊かな気づきを与えてくれるアーティスト。彼らの仕事に迫るべく、開催した「アプローチ！アーティストに学ぶ世界のみかた」では当館コレクションの中から近現代作家14名の絵画、立体、写真作品約60点を、「自然」「社会・人間」「造形」といったキーワードのもとに展観した。目に見えない引力や重力をシンプルな造形で可視化する植松奎二や、戦後の混乱期にたくましく生きる人々を撮影したハナヤ勘兵衛など、制作を通して世界と関わるアーティストたちの視点と制作の手法に迫った。関連イベントとして、植物や農業という営みをモチーフに作品を手がける出品作家の中川佳宣氏によるワークショップ「植物を写す『蜜蝋ドロ잉』」を開催した。

「具体美術協会／芦屋」では、国際的な活動を展開した前衛美術グループ「具体美術協会」(具体)が1954年に芦屋で結成されてから70年という節目に、「具体」に属した作家の作品約45点とともに当時の資料を展観し、1972年に解散するまでの「具体」の時間を紹介した。本展では「具体」の活動期間を3つの時期に分け、点数と内容ともに他に類を見ない充実した当館コレクションから「具体」の歴史的な歩みを丁寧に追うような内容を心掛けた。「具体」ファンや研究者、美術館関係者だけでなく、本展を機に「具体」を知ったという方々まで幅広い層にご来館いただいた。また、2特集の同時開催によって、関心の異なる来館者の方々が当館収蔵作品に親しんでいただけたと考える。会期中には、ともに1980年代から「具体」研究に携わってこられた、鳥取県立美術館館長の尾崎信一郎氏、関西大学文学部教授の平井章一氏をお招きし、講座「『具体』研究と1980年代」を開催した。

(大槻晃実、川原百合恵)



「アプローチ！アーティストに学ぶ世界のみかた」展示風景 第2展示室



「具体美術協会／芦屋」展示風景 第1展示室

創立100周年記念

信濃橋洋画研究所—大阪にひとつ美術の花が咲く—

2024/6/22(土) — 8/25(日)

大大阪時代の1924年、気鋭の洋画家で二科会会員の小出檜重、国枝金三、黒田重太郎、鍋井克之が、東京や京都に比べて芸術の実らない地とされていた大阪で、洋画家を志す者の指導を目的に創立した信濃橋洋画研究所。本展では本研究所の活動の全貌とその意義を再検証するべく、本研究所の講師や研究生20名の作品約60点と多数の資料を展観した。

1944年に閉鎖されるまでの約20年間に、田村孝之介や長谷川三郎ら多数の優れた画家を輩出した本研究所の活動を追うべく、本展では「プロローグ 創立前夜・1923年 一第10回二科展と関東大震災」「Ⅰ 創立 一講師4人と大大阪」「Ⅱ 洋画を学ぶということ 一講師たちの修業時代の作品から」「Ⅲ 日々の講習」「Ⅳ 集った研究生たちの活躍」の各章を設け、さらに本研究所の活動の中でも先進性と独自性が光る「Ⅴ 夏季講習会」「Ⅵ 信濃橋洋画研究所展覧会・全関西洋画展覧会」を特集した。本研究所は関西洋画史における重要な存在でありながら、これに焦点を当てる大規模な展覧会はこれまで開催されてこなかった。待望の開催となった本展を通して、来館者は関西の洋画史への理解を深めていただくとともに、大阪を拠点に花ひらいた豊かな洋画の名品たちを楽しんでくださった。

関連イベントとして、和歌山県立近代美術館館長の山野英嗣氏による講演会「信濃橋の時代」や、大大阪時代の活気を味わう「大大阪を歩く・大阪近代建築めぐり」を、高岡伸一氏(近畿大学建築学部教授)の案内のもと開催したほか、担当学芸員によるスライドトークやギャラリートークを行った。

(川原百合恵)



展示風景 第1展示室



展示風景 資料

今井祝雄—長い未来をひきつれて

2024/9/14(土) — 11/17(日)

本展は、作家活動60年の節目に開催した今井祝雄の大規模な個展である。1946年に大阪で生まれた今井祝雄は、1964年の17才で第14回具体美術展へ初出品し、翌年最年少作家として具体美術協会(具体)会員となった。今井は20代で「大阪万博」「第1回草月実験映画祭」「蛍光菊」「映像表現 '72」「空間から環境へ」といった美術とテクノロジーとが接近した1970年代の主要なイベントや展覧会などの多くに参加、1980年代に入ると、ビデオの仕事を精力的に進めるとともに、街中の公共的空間に作品を設置する活動も行うなど、現在も国内外で精力的に発表を続けている。

本展では、1960年代の「具体」時代の作品から80年代にかけて発表した、平面、写真、映像作品を中心に、コロナ禍に生まれた作品や本展に向けて制作された新作を含む約70点の作品を「Ⅰ ここからここへ—現在」「Ⅱ ときのまにまに—1980←70年代」「Ⅲ しろからはじまる—1970←60年代」の各章で紹介した。

若くして作家活動をスタートした10代から現在にいたるまでの多様な活動を、平面や写真作品、映像作品などとともに、作家の著作や貴重資料などの関連資料から多角的に辿ることで、日本の現代美術を牽引する作家の一人であることを、本展を通して知っていただけたと考える。

会期中は、映像作品の特別上映会とあわせて行った今井氏と映像作家の林勇気氏とのトークや、今井氏とアーティストの藤本由紀夫氏による「音」の作品に関するトークのほか、今井氏の案内によるパブリックアート巡りなどを行った。

(大槻晃実)



《瀑布—ビデオの時代》2024年



展示風景 第2展示室

芦屋の文化財再発見—最新のヨドコウ迎賓館温室跡発見まで—

2024/11/30(土) — 2025/2/9(日)

芦屋市内に数多く存在する埋蔵文化財(遺跡)の発掘の歴史と、当館で収蔵している歴史資料を公開した展覧会。

それぞれ、第1展示室と第2展示室に分けて展示を行った。第1展示室に芦屋廃寺跡や金津山古墳などの市内遺跡から出土した瓦や土器などの遺物と、古墳の周濠や中世の井戸などの遺構の写真を展示。

第2展示室には徳本上人に関する仏教美術資料や、『伊勢物語』とその主人公のモデルである在原業平に関する掛け軸や絵巻物、『摂津名所図会』や『太平記』などの中近世の芦屋を知ることができる古文書、打出焼や旧貴志康一郎スタンドグラスなどの近現代の芦屋の生活文化を知ることができる資料を展示した。

関連イベントは講演会や歴史ウォーク、コンサートなどを多数実施した。

講演会は、奈良県立橿原考古学研究所客員研究員の森岡秀人氏による「大発見でつづる芦屋の遺跡」や大阪商業大学教授の明尾圭造氏による「歌名所としての芦屋～『伊勢物語』にみる絵画表現～」、芦屋市国際文化推進課学芸員の竹村忠洋氏による「国指定重要文化財ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)の魅力」、帝塚山大学教授の杉崎貴英氏による「芦屋の仏教文化財をめぐる」を実施。

歴史ウォークは武庫川女子大学教授の三宅正弘氏による「芦屋博士と歩く 石から見る芦屋の歴史」と「芦屋博士と歩く 芦屋浜モダニズム」を実施し、芦屋市内を参加者と巡った。

その他、ヴァイオリニスト磯辺陽氏によるミニコンサート、ヴァイオリニスト中嶋弥生氏による貴志康一の楽曲を中心としたコンサート、鳥飼りょう氏による生演奏を伴うサイレント映画上映会も実施した。

(山本剛史)



展示風景 第1展示室



イベント風景 歴史ウォーク

第42回 芦屋市造形教育展

2025/2/15(土) — 2/23(日)

芦屋市内の就学前施設、小学校、中学校のこどもたちの作品を全館(歴史資料展示室除く)にわたって展示した。(山本剛史)



展示風景

とあるひのこと 平井真美子

2025/3/1(土)

2020年に開催した「美術と音楽の9日間 rooms」へ音楽展示で参加した平井真美子が、2019年末から約2年半“とあるひ”と題してピアノ短編曲を創作し、2022年夏、当館のピアノ「パーゼンドルファー」で“とあるひ”を再記録、アルバム「とあるひ 記録集」をリリースした。このリリースを記念し、当館で立体作品の展示や公開録音、トークを開催した展覧会とあわせ、夕方からはライブを行った。光と闇、時をキーワードに平井の音の時間を共有する一日限りの展覧会、「とあるひのこと 平井真美子」を開催した。(大槻晃実)



参考図版：平井真美子氏(Photo by yayoi arimoto)

歴史資料展示室

企画展示

ヨドコウ迎賓館竣工100周年記念事業 令和5年度芦屋市内遺跡発掘調査速報展

2024/4/13(土) — 8/25(日)

令和5年度の夏に実施されたヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)の敷地を対象とした発掘調査の成果を紹介した展示。

竣工当時の建築部材や出土した建物跡の写真を中心に展示した。(山本剛史)



展示風景

芦屋と阪神・淡路大震災

2024/9/14(土) — 11/17(日)、11/30(土) — 2025/2/9(日)、
2025/2/15(土) — 2/23(日)

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から30年の節目に行った展示。震災発生時刻で止まった時計や、震災発生直後の市内の被害状況や復興の様子がわかる写真を展示した。(山本剛史)



展示風景

2025年は大阪・関西万博が開催される年です。今から55年前、1970年に大阪・吹田市で日本万国博覧会(大阪万博/EXPO'70)が開催されました。アジア初、日本で最初の国際博覧会として、世界から77カ国が参加し、6,400万人を超える入場者を数えました。テーマ「人類の進歩と調和」のもと、高さ約70メートルの太陽の塔がお祭り広場で堂々とそびえたつ様は、多くの人々の記憶に強く刻まれています。大阪万博は、1964年の東京オリンピック以来の国家プロジェクトとして、多くの企業や研究者、建築家、音楽家らがパビリオン建設や映像・音響などのイベント、展示の制作に起用されました。

当時、具体美術協会(具体)もグループを挙げて本事業に深く関わりました。万国博美術館の屋外では《ガーデン・オン・ガーデン》を共同制作し、みどり館のエントランスホールではグタイグループ展示を行ったほか、大阪万博の会期終盤に向かう8月31日から9月2日には、お祭り広場で「具体美術まつり」を開催、会員たちのアイデアのもと《とぶ光る》《箱》《スパンコール人間》などユニークで魅力的な演目を上演しており、多くの観客が心を躍らせていたと想像します。また、万国博美術展に吉原治良、白髪一雄、元永定正が出品し、「アストロラマ」の映像制作に聴濤裏治、名坂千吉郎、堀尾貞治、吉田稔郎が協力したほか、お祭り広場の夜のイベント「動く美術と光の広場」「旗、旗、旗と光の広場」(プロデュース・吉原治良、構成・元永定正)も開催しました*1。このように、大阪万博と「具体」のつながりは、展覧会やお祭り広場でのイベントなどで有名ですが、「具体」メンバーが関わった催しは、大阪万博会場以外でも行われていました。

大阪のホテルプラザと毎日ホールを会場に、1970年7月10日と11日の二日間にかけて「夏のグランドファッションショー」が開催されました。大阪万博の連動企画として、上田安子服飾学院と関西女子学園短期大学などが主催となって開いたこのファッションショーでは、「具体」会員の嶋本昭三、元永定正、村上三郎、今井祝雄が関わった「第8部ピナコテカファッションショー」が行われています*2。当時、関西女子学園短期大学に嶋本が教授として就任していたことが縁となり、彼らが招かれたと考えられます。では、彼らはどのような服をデザインしたのでしょうか。当時の記録写真を見ると、独創性を追求した「具体」らしいとてもユニークなデザインの服を考案していたことがわかりました。

嶋本は、たくさんのマジックテープが取り付けられた服にカラフルな布地を貼り付けていくデザインを用いています。一方、元永は、金属の箱からモデルが登場する演出を行い、薬品を用いて発生させた煙をチューブから漂わせる服を考案していたり、村上には新聞紙を貼り合わせて大きな楕円形の被り物のような服を設計したほか、今井は伸縮性のある生地の内側に軟式テニスボールを入れ込んだ凹凸のある服をデザインしています*3。なお、村上がデザインした服は女性モデルから敬遠されたようで、唯一男性が着用したという逸話が残っており(モデルは村上と関係が深かった人物・正光力)、あまりにも斬新なデザインに対する、当時のモデルの困惑ぶりが窺われます。翌日の毎日ホールでのショーは、照明を落とした舞台で行われました。記録写真からは、元永がデザインした服が光を放つ仕組みももっていることがわかります。

彼らがデザインした服は、布地の着脱や薬品による煙の発生といった刻々と変化を見せるものや、情報を伝えるメディアである新聞紙を素材にしたり、凹凸による陰影の美しさが表れていたりと、各作家の表現の特徴や傾向が強く表された、独自性の強い唯一無二の「作品」でもあったのです。

註)

*1 「具体」と大阪万博の関係については次の資料を参照。加藤瑞穂「万博と具体美術協会」『EXPO'70 大阪万博の記憶とアート』大阪大学出版会、2021年、pp.47-74

*2 「夏のグランドファッションショー」進行台本(1970年7月11日)〔村上三郎旧蔵資料(大阪中之島美術館蔵)〕

*3 今井祝雄氏へのインタビューより(2021年1月20日)。なお、元永定正がデザインした服については、中辻悦子氏からも情報をいただきました。



左より：元永定正デザイン、嶋本昭三デザイン、今井祝雄デザイン



村上三郎デザイン



ファッションショーの後には、嶋本たち4人によるトークも開催された。左より：今井祝雄、嶋本昭三、村上三郎、元永定正

ファッションショーの様子(1970年7月10日(ホテルプラザ・大阪))
撮影：今井徳保、写真提供：今井祝雄

夏のグランドファッションショー／第8部ピナコテカファッションショー
1970年7月10日(ホテルプラザ・大阪)

1970年7月11日(毎日ホール・大阪)

主 催：財団法人上田安子服飾学院、関西女子学園短期大学、
服飾手帖社、上田デザイナー学院、総合デザイナー学院、
上田デザインルーム

デザイン：上田安子服飾学院、総合デザイナー学院、
ニューデザインコンテスト入選者、上田デザイナー学院生徒、
コンテスト審査員協賛作品

スタッフ：岡 秀直

演 出：荒井淳子

音 楽：スライトノーツ

ナレーター：山口幸生

美 容：梅本文子

1924年大大阪時代に、気鋭の二科会会員・小出檜重、国枝金三、黒田重太郎、鍋井克之が初代講師となって創立した信濃橋洋画研究所(1931年8月に中之島洋画研究所と改称)についての展覧会を、2024年に当館で開催しました*1。本研究所は1931年2月に小出が逝去した後、研究生たちの中から新たな講師を迎えて活動を続け、1944年6月に閉鎖されます。

本研究所が終了した理由として、本展では、太平洋戦争の戦局が逼迫し、応召や疎開によって研究生が減少したことを紹介しました。本稿では、戦争が佳境を迎える当時の美術界の状況と、本研究所の講師を務めた面々の戦時下での活動を振り返り、本研究所が終焉に向かう背景をさらに詳しく見ていきたいと思います。

1937年7月に日中戦争が勃発、翌年4月に国家総動員法が公布され、すべての国民と物的資源が戦争に導入される体制が敷かれます。この波は美術界にも及び、1943年には絵具などの画材や彫刻の素材は、日本美術及工芸統制協会という団体によって受給を認められた美術家のみへの配給制となりました。

一部の画家たちは戦争記録画の制作に携わり、巷で開かれる展覧会も、戦争記録画や銃後の生活をテーマにした作品の展示が主流になります。

本研究所のメンバーの中では、田村孝之介が1940年に北支、1942年にビルマへ、黒田重太郎が1943年に北支へ派遣され、戦争記録画の制作を手掛けました。伊藤継郎は1944年に満州へ出征し、古家新や小出卓二らは、画家や彫刻家47名が1944年春に結成し各地の炭鉱や工場への慰問活動などを行った軍需生産美術推進隊のメンバーに名を連ねました。鍋井克之はこれらには加わらなかったものの、弟子である古家らの推進隊の仕事に同行したのでしょうか、1944-45年頃のスケッチブックには福岡県の高田炭鉱でのスケッチが残っています*2。

そして、もうひとりの初代講師で本研究所の経理など事務的な面にも貢献していた国枝金三は、この頃病に伏していました。国枝は大阪高等商業学校在学中、階段から転落して右腕を骨折したことを機に左腕で絵を描き始めたのですが、黒田の回想によるとこの右腕の古傷から病に侵され、1942年頃に右手を切断。しかし病は回復せず、1943年11月、57歳で帰らぬ人となりました*3。

さらに、国枝の逝去とほぼ時を同じくして、黒田と鍋井は所属していた二科会を退いています。脱退のきっかけは、挙国一致体制において、文部省が主催する文展(文部省美術展覧会)へ在野の美術団体を引き入れ統制しようという動きが始まり、二科会もこれに参加したことでした。二科会は元々、文展の洋画部において審査上冷遇されることに反発した、新傾向の洋画を志す気鋭の画家たちが1914年に独立してできた団体で、「流派の如何にかかわらず、新しい価値を尊重し創造者の制作上の自由を擁護し、拔擢する」*4ことを標榜して結成されたものでした。戦時下の非常事態であるにせよ、再び文展に合流するということが二科会の歴史的使命は終わったと考えた黒田と鍋井は、二科会の解散を提言しますが、他の会員たちの賛同を得られず脱退に至ります。

そもそも本研究所の創立は、関西出身の4名が1923年にそろって二科会会員となるという出来事に端を発しています。創立の目的には、関西における二科会の拠点としての役割も含まれており、実際に、ここで学んだ研究生たちの多くが二科会に挑戦し、後に会員となりました。大阪におけるモダンな洋画の発信拠点という本研究所の使命は、その根を二科会という団体に持っていたとも言えるのです。このことを考えると、小出と国枝が世を去り、黒田と鍋井も二科会を退くという出来事は、本研究所の創立のきっかけであった二科会における4者の集結が解かれたということで、本研究所が終わりに向かうひとつの局面であったと見ることもできます。

以上のように、画家たちは自由な制作活動が制限される挙国一致体制において、それぞれに戦時下の画家としてのふるまいを考え、行動していたようです。信濃橋洋画研究所は他の多くの研究所とともに閉鎖に向かいますが、戦後、本研究所の役割は大阪市立美術館付設美術研究所に受け継がれ、松井正や古家新ら本研究所を巣立った画家たちが指導に当たりました。さらに京都市立美術専門学校(現・京都市立芸術大学)や浪速芸術大学(現・大阪芸術大学)などの芸術大学も開設され、ここでは黒田、鍋井のほか伊藤継郎や松井正、津高和一らが教鞭をとり、関西の地で洋画の文化を醸成し続けていきました。

註)

- *1 特別展「創立100周年記念 信濃橋洋画研究所 一大阪にひとつ美術の花が咲く―」2024年6月22日―8月25日。
- *2 大阪市立美術館所蔵(鍋井克之関係資料)一括372点に含まれる。本資料については同館主任学芸員の知念理氏による「銃後と鍋井克之」(『没後50年 富貴のひと 鍋井克之』2019年、pp.29-30)に詳しい。
- *3 黒田重太郎「関西の洋画壇 12」『日本美術工芸』1964年12月号(通巻315号) pp.42-48。ここで黒田は1943年の自身の動向について、二科会を脱退した経緯やその旨を報告するために病床の国枝を見舞ったことを回想している。
- *4 「沿革(二科会について)」公益財団法人 二科会 ホームページより(最終アクセス: 2025年1月15日)。



戦地でスケッチブックを携える黒田重太郎。1943年12月。個人蔵



黒田重太郎《娘子関》1943年 油彩、カンヴァス 個人蔵

今年度、当館に2点の水彩画が寄贈されました。その水彩画の作者は児玉多歌緒(本名：児玉隆男)という人物で、大正時代から昭和時代初期にかけて芦屋を中心に活動した日本画家です。本稿では、新寄贈品と児玉多歌緒について紹介します。

寄贈品の内1点は《波打ぎは》という名前で、大正時代の芦屋浜で行われていた地曳網の風景を描写したものです。3隻の船と24人の男衆で地曳網漁をする様子が描かれています。中央に地曳をする男衆、網を積んだ2隻の船、網の曳き具合を調整する船、それぞれの船に乗る人々の動きなど、地曳網漁の様子が詳細に描かれています。海岸には、1組の男女が座り、犬とともに漁の様子を見物しています。右下に「波打ぎは 児玉隆男」と書かれています。この作品は1996年に当館で開催された展覧会「手々かむイワシいらんかえ 一芦屋の海と暮らし」に当時、借用品として出陳されていました。

もう1点は資料名が判明していません。越後獅子の格好をした2人の子どもが描かれています。背の高い子が背の低い子の肩に手を回し、背の低い子はその手を握っています。右下には「多歌緒 たかを」と書かれています。

この2点の水彩画の作者、児玉多歌緒は1895年12月4日に大阪市東区(現：中央区)で生まれました。大阪船場で木綿問屋を営む父児玉平助と母いとんの長男でした。

1907年に父平助が亡くなりますが、家業を継がずに画師蘆月のもとで日本画を修行し、草月の号を貰います。以降、友禅染の手描きを始め、服飾関係の図案などの手描きの仕事を続けました。1908年頃に兵庫県武庫郡打出村(現：芦屋市浜町)に居住します。

1918年の11月に打出村から精道村樋口新田(現：芦屋市樋之口町～門前町あたり)に転居します。この頃に打出、芦屋の海岸、六甲山を多くスケッチしていました。

1924年に兵庫県飾磨郡(現：姫路市)の西蓮寺住職の井淵了慰の娘、井淵なるゑと結婚します。1933年1月に歌誌『六甲』の創刊に参加します。『六甲』への出詠は、1943年の廃刊まで続けていました。1936年2月に『六甲』の選者となります。1937年に福田青明の推挙で神戸の光徳寺会館家庭塾の日本画講師となりました。1944年6月に朝日新聞神戸の阪神版『歌壇』の選者になります。1945年7月16日、栄養不足による脚気が昂じ、心臓障害で亡くなりました。

児玉多歌緒は主に風景画を手掛けており、30冊近くに及ぶスケッチブックに残しています。その一部が当館に収蔵されています。風景画のモデルは芦屋や河内などの田園風景の他に、越前や甲斐などの遠方の村落風景もあります。登山好きだったためか、六甲山の他に金剛山や葛城山などの山岳風景も描き残しています。

児玉多歌緒は画業を生業としつつ、詩人としての活動も積極的に行っていたことがわかります。スケッチブックの中に模写した土地に関する詩を度々残しています。詩人同士の交流は、上記以外に『六甲』創始メンバーの一人である詩人富田碎花ともあったことが、息子児玉隆也(1937-75)が富田に宛てた手紙(当館蔵)から読み取れます。

今回の寄贈を機に、今後も児玉多歌緒の画業や交流関係についての調査研究を進めていきます。

参考文献

児玉隆男『歌集 織月』みるめ書房、1991年*1
芦屋市立美術博物館「平成8年特別展 手々かむイワシいらんかえ 一芦屋の海と暮らし」1996年

註)

*1 『歌集 織月』は児玉多歌緒の詩を息女花岡秋子(1928-2022)が集成し編集したものの。



《波打ぎは》



作品(越後獅子)



『児玉多歌緒スケッチブック 山と語る』より《地獄谷の奥一岩とあそぶ子等(2) 六甲山習作一》1929年

双龍環頭大刀 柄頭

古墳時代 八十塚古墳群出土

八十塚古墳群は芦屋市市街地北東部の山麓丘陵から西宮市にかけて分布する6世紀後半から7世紀初頭に造られた古墳群です。立地から剣谷、苔案園、老松、岩ヶ平、朝日ヶ丘の5つの支群に分けられています。

2012年の調査で岩ヶ平支群第61号墳から双龍環頭大刀が出土しました。金属製で、出土した時から縦長に変形していました。2017年には芦屋市指定文化財に指定されました。



2025年度の展覧会予定

2025/3/15-6/15	隙あらば猫 町田尚子絵本原画展
2025/7/5-8/31	具体美術協会と芦屋、その後
2025/9/20-11/16	生誕120年 山崎隆夫の仕事—絵画と広告デザイン(仮称)
2025/12/6-2026/2/8	浮世絵展(仮称)
2026/2/14-2/22	第43回 芦屋市造形教育展
2026/3/10-3/29	第68回 芦屋市展
各展覧会に準ずる	歴史資料展示室常設展 年に数回企画展示を予定

美術博物館 <https://ashiya-museum.jp/>
X@ashiyabihaku
Instagram@ashiyacitymuseum

芦屋市立美術博物館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町12-25
Tel:0797-38-5432 Fax:0797-38-5434

美博だより 2025年3月15日発行(初版第1刷)
発行者 芦屋市立美術博物館